

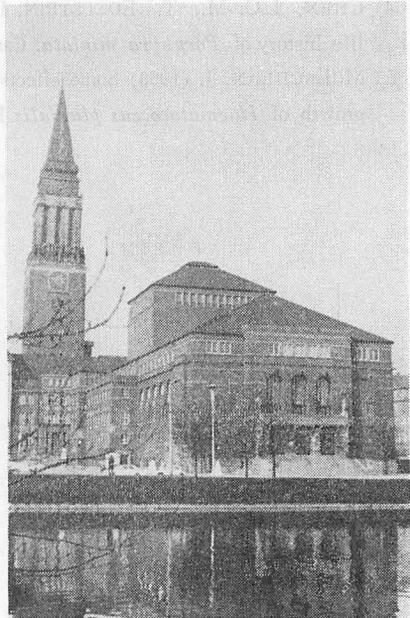
岡村金太郎先生とキール大学

尾形 英二*

筆者は、西ドイツ・キール大学のゲスナー教授から Visiting Professor として招かれて、昭和45年3月末からキール大学の Institut für Meereskunde に3ヶ月近く滞在した。その時奇しくも、日本海藻学の鼻祖、故岡村金太郎先生とキール大学とが、深い因縁に結ばれるにいったことを体験した。



Institut für Meereskunde an der
Universität Kiel



岡村喬生氏が出演しておられたキールの歌劇場

そもそのきっかけは、キールの歌劇場でヨーロッパ有数の日本人オペラ歌手として、岡村先生のお孫さんである岡村喬生氏が活躍しておられたことにある。所用でハンブルグに出かけた帰りの車中で、偶然知りあった日本人の方が「最近キールに来て、海苔の研究

* 水産大学校（下関市吉見永田本町1944）

をしているというのは貴方のことか？それなら私の祖父を知っているか？」と尋ねたので、「その方のお名前は」と聞くと、「岡村金太郎」というお答えだった。それなら知っているところではない、日本海藻学上の大先生であられたし、筆者は、先生の女婿の故瀬川教授の指導をうけたものである。と答え、その奇遇に驚きあったものである。

筆者はこの話をゲスナー教授にしたところ、教授も大におどろかれて、「本当にあの Great Okamura の Grand son であるか？」と筆者に念を押すしまつであった。その後、ゲスナー教授の令嬢が大のオペラファンであることを知ったので、岡村氏に請うてそのプロマイドを頂き、彼女にさしあげた。ゲスナー教授一家は大変喜ばれて、一夕、小生を含めて、岡村氏御夫妻をディナーに招待さ



左から岡村喬生氏、同夫人、ゲスナー教授夫人ハンマー博士、ゲスナー教授、同令嬢。

れた。話はオペラから海藻学まで広汎にわたってはすみ、大いに国際親善を深めた。その席で、教授は Institut の壁面にかざりたいからと、岡村氏に金太郎先生のポートレートを熱心に所望された。このゲスナー教授の希望はその後8月に岡村夫人が東京に帰省された時に果されたはずで、現在すでに Institut の壁面に飾られているものと思われる。

晩春の一夕、筆者は岡村氏から上等の席の切符を世話を世話をいたたき、グノーの歌劇「マルガレーテ」(原作名・ファウスト)の主役メフィストを演じる岡村氏の舞台姿に接した。その演技および声量は、まことに堂々たるもので、多くのドイツ人歌手を圧倒しての名演技であった。一幕終るごとのカーテンコールでは、岡村氏に対する拍手が一段と高く、おそらくこの晩のたった一人の日本人観客であったろう筆者は「日本人ここにあり」と叫びたいような感激をおぼえたものであった。

このようにして、キール大学と岡村金太郎先生との深い因縁が結ばれたわけであるが、最後に筆者は、ゲスナー教授からの日本の藻類学者に対する要請をおつたえして、この駄文のしめくりにした。それは、ゲスナー教授が Chief Editor をしている Internationale Revue der gesamten Hydrobiologie に、ぜひとどしどし原稿を寄せて頂きたいとの希望である。投稿御希望の方は、日本での Editor である東京水産大学の有賀祐勝博士に連絡をお願いする。